

5 上演後の新聞から

1999年3月21日～24日
仙台公演レビュー

河北新報

1999年(平成11年)3月22日(月曜日)

客席を取り囲んだ合唱団の熱唱が、会場全体を包み込んだ。仙台市青年文化センターで二十一日、初演されたオペラ支倉常長「遠い帆」。壮大なドラマを見事に描き上げた「陰の主役」は、市民によって構成された「遠い帆合唱団」と、仙台少年少女合唱隊だった。仙台開府四百年を記念するオリジナルオペラは、市民の手によって、確かに世界に発信された。

「メンバー一人ひとりの人生経験をそのままステージに生かしたい」という目標通り、「老若男女」が入り交じる合唱団の厚み、幅の広さが十分に発揮された。作曲家の三善晃さんが「練習の積み重ね以上のものが出来た」と言うほどの見事な出来。聴衆も、合唱団の生き生きとした歌声、演技に大きな拍手を送った。

河北新報

1999年(平成11年)3月30日(火曜日)

本間 雅夫(作曲家)

待望久しい「支倉オペラ」の上演が始まった。巨費を投じ長い時間をかけて仙台市が取り組んだ一大プロジェクトである。正式には、仙台開府四百年記念事業オペラ支倉常長「遠い帆」の上演である。当初から作曲三善晃・脚本高橋陸郎・演出佐藤信という顔ぶれを聞いてだけで大きな期待をもったが、初演を聴いてその期待を超える見事な出来上がりであった。関係者の皆さんに心からおめでとうを申し上げたい。

密度高く詩のよう

題材としての支倉遣欧使節は、粉飾や追加によって様様な筋立ても可能であろうが、高橋の脚本はそれを廃して、ほとんど忠実に史実に基づいているようだ。時代(慶長)と権力(家康、政宗)と野心(ソテロ)に翻弄されながら運命的に生きた一人の人間、支倉六右衛門の生きざまを軸に焦点化されている。言葉は極めて密度の高い表現で、詩のようにつづられる。また、これまでのオペラの観念とは異なり、童声を含めた合唱の比重が極めて大きく、オラトリオのようでもある。この辺は当然、作曲家と打ち合わせての事だろう。いわば、オペラに付き物のメロドラマの要素は全くない。ソリストは六右衛門・勝部太、ソテロ・伊達英二、政宗・高橋啓三、家康・加賀清

読売新聞(夕刊)

1999年(平成11年)3月29日(月曜日)

三宅 幸夫(音楽評論家)

一つとや／広い海原／果てまで……仙台開府四百年を記念するオペラ支倉常長「遠い帆」は、童たちの数え歌ではじまる。台本は高橋陸郎、音楽は三善晃。この新作は伊達政宗の命でローマを目指した遣欧使節がキリスト教禁令によって挫折を強いられた史実を下敷きとしているが、初演の舞台は御当地オペラの次元をはるかに突き抜け、普遍的な人間の生きざまを描くことに成功している。

まず、支倉六右衛門常長(勝部太)を英雄に祭り上げたりはしない。運命にもあそばされて当惑するばかりの主人公は、人間の弱さそのもの。または人を捨て駒にして権力闘争に血道を上げる政宗(高橋啓三)と家康(加賀清孝)も、人間の傲慢さそのもの。それだからこそ帰路に著く六右衛門が運命の不条理を受け入れて「あとは神が考えてくださる」と語るとき、待ち望んでいた一条の光がドラマにさしこんでくるのだ。

つづく宣教師ソテロ(伊達英二)の驚愕「い

つたいつから、そんなに強くなられた」ともども、このくだりには作品のすべてが凝縮されている。三善の音楽もアリアふうではなく能楽ふうの節回りで、声高に叫ぶことのない主人公の変容を浮き彫りにしてみた。

また佐藤信の演出もオーケストラ(仙台フィル)のなかに簡素な十字架の所作台をしつらえた思い切りのよい空間構成。時空を自在に行き来する筋立てをあとやかに処理してみた。さらに外山雄三の手堅い指揮、唯一の女声独唱となる「影」(菅英三子)のこまやかな語りと歌、そしてオーディションで選抜された市民合唱の途方もない迫力も忘れることはできない。

一つとや／広い海原／果てまで……童歌で開かれた全一幕は、七十分ほどのうちに、ふたたび童歌で閉じられる。日本のオペラだから童歌という短絡的な選択ではないだろう。音楽の流れに外枠をはめるといふ単純な仕掛けでもないだろう。

この劇中でも見え隠れする素朴な調べは、ドラマの背後でつねに鳴り響いている通奏低音。評者には、われわれが生まれる前にいたころ、そして死んだ後に帰ってゆくところを指し示しているように思えた。

(21日仙台市青年文化センターシアターホール)

と敬服させられる。子どもたちも本当に良く歌っていた。音色の幅がもう少し欲しいけれども、それでもここまで歌い込んだには感心させられた。立派である。だから今後が楽しみだ。アマであれプロであれ、自分が体験した作品の質と、その体験の質によって、変化し進歩するものだからである。

歌詞聞き取りに難

しかし、何といっても気になるのは、かなりの部分で歌詞が聞き取れないことだ。これには困った。でも、三善のこれまでの作品でもそれはあった。例えば、「レクイエム」や「詩韻」などが私はその事と作品の価値とは直接には関わらないと考えていた。オケが単に伴奏だけの役割を超えてものを言う事は欠かせないし、合唱やソロがいかにぶつかり合う事もある。しかし、オペラとなるとどうだろう。しかも、精神的内容の激しい言葉と、初演曲である。前もって脚本を少し勉強した程度では理解は無理だ。そのためか、字幕スーパーが欲しかったという声は結構多いようだ。有名なオペラでも、言葉を全て聞き取る事は難しいのだから。

ともあれ、これだけの事業の成功を関係者と共に喜びたい。これから始まる東京公演で、仙台経由のこの新しいオペラの創作は、どのように評価されるか楽しみでもある。

1999年4月2日～4日
東京公演レビュー

朝日新聞(夕刊)

1999年(平成11年)4月8日(木曜日)

畑中 良輔(音楽評論家)

四月二日、キリスト受難の聖金曜日、高橋陸郎原作・台本、三善晃作曲の「オペラ支倉常長「遠い帆」」が、世田谷パブリックシアターで東京初演された(初演は三月二十一日、仙台市青年文化センター)。仙台開府四百年記念の委嘱作品である。

支倉常長(六右衛門)といえば「天正少年遣欧使節」に次いで「慶長遣欧使節」として知られるものの、支倉自身について語られ、記される事は少ない。天正の少年達がインド洋のほうを回ってローマ入りしたのに対し、支倉はメキシコをはさんで太平洋、大西洋を横断しての渡欧である。

常長の父は政宗の不興を蒙り切腹。支倉家断絶を目前に控え、彼自身追放同様のところを召し出され、遣欧使節の大役を仰せつかったのは何故か。

原作二十五章を二十章に削ぎ落とした高橋の台本から、キリスト布教

読売新聞「北から南から」

1999年(平成11年)6月13日(日曜日)

明間 輝行(東北経済連合会会長)

近ごろうれい思いをしたことが一つある。

伊達政宗の仙台開府四百年を記念し、仙台市などが東京で上演した創作オペラ「遠い帆」に、中央の新聞や音楽専門誌が、惜しめない賛辞を寄せたことである。「オペラの観念を超えた劇場空間の創造」(朝日)「市民参加と、音楽的、芸術的水準の高さが共存」(日経)「御当地オペラの次元をはるかに突き抜け、普遍的な人間の生きざまを描くことに成功」(読売)「権力者の間で翻弄された運命が、緻密な音の組立のうえに見事に描かれる」(音楽の友)一などなど。

師の要請は名目だけで、メキシコの通商を目論む家康と、当時の強国スペインを後ろ盾に奥州勢力の拡大、あわよくば天下を狙った政宗の野心。この間に立つてフランシスコ会派の司教の座を画策するソテロという構図がうかがい上がる。布教禁令を出しながら遣欧使節を送ろうとする不条理な計画の中で、この矛盾の始末は政宗の知るところでなく、支倉が一身に引き受けねばならぬという重い十字架を、彼は家名と引き換えに背負うこととなったのである。彼はまさに「捨て石」だった。

舞台は十字架がしつらえられ、支倉の心と共にオーケストラは四つに分断され、劇を主導していく合唱は背後にあってその時の状況を描き出す。選びぬかれ、彫琢を重ねた高橋の台本はむしろオラトリオに近いが、それだけに支倉の内面をえぐり、オーケストラが登場人物の心理と行動を異常なまでのリアリティーの中うかがい上げさせて息もつかせない。スペインが

「遠い帆」とは
いかなるオペラか

らローマへ向かう輝かしい希望の光は、家康の禁令が欧州にも知られるあたりから、次第に絶望状態に向かう。音たちは言葉と拮抗し、同化し、不条理心理劇としての緊張感の中に聴衆を捉え込んでしまう。三善の音楽は支倉を単に失意の男に終わらせなかった。忍耐する人の「勁い意志」を音の中に深く、現代社会構造にもかかわる普遍性を与える。

この時支倉常長は、二十世紀も終わりのいま、甦った。そうして常に死と向かい合ってきた支倉の「男の美学」を佐藤信演出はあたたかい人間の眼で見守り、観世榮夫と共に舞台に重さと深さを与えた。これまでのオペラの概念を超えた劇場空間の創造に、心を合わせた全スタッフ、キャストの努力の拍手。支倉の勝部太、家康の加賀清孝、政宗の高橋啓三、影の菅英三子、仙台フィル、各合唱団それぞれが渾然一体、これらを束ねて外山雄三体当たりの熱い指揮が酔わせた一時間だった。

このオペラの上演委員長に推され、裏方を務めた一人として、感動を新たにしている。

政宗の命により、遣欧使節としてローマに赴いた伊達藩士、支倉常長が、キリシタン禁制下で挫折を強いられた史実を題材にした、この作品。かつて、作曲家の山田耕筰が構想にとどめていたものを、仙台市が、その遺志を引き継ぎ、幽玄な能の様式を採り入れて、完成した。和魂洋才の東北初オペラである。

観世榮夫(総監督)、三善晃(作曲)、高橋陸郎(脚本)、佐藤信(演出)、外山雄三(音楽監督・指揮)。当代一流の著名な各氏を制作スタッフに迎え入れたのが、成功に導く力になった。

だが、それも、オーディションで選ば

れた市民合唱団、少年少女合唱隊百二十人と仙台フィルハーモニー管弦楽団との渾然一体となった音響に支えられたからこそである。芸術性の高い市民参加のオペラが誕生し、全国へ情報発信した意義は大きい。

創造的な文化、芸術活動は地域を活性化させる「資源」の一つと考える。創作、表現、鑑賞の場を通じ、感動との出会いを求める人々が集まり、交流の輪を広げる。その輪が地域間に、やがては国家間に及ぶこともあろう。

縄文以来の歴史と風土に培われた東北地方には、文化、芸術分野で、まだ数多くの地域資源の芽が隠れている。

これからもなお、その芽を探し、大切育てて行きたいと思う。